

# 東京バッハ合唱団 月報

[第 605 号] 2012 年 11 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604  
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732  
mail: bachchortokyo@aol.com http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.605

November 2012

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## “カンタータ日本語演奏シリーズ”の推進、選曲案 連続演奏の最終回《ヨハネ受難曲》まで辿りついたら

大村 恵美子 (主宰者)

早くから創立 50 周年の到来を待ちわび、4 大合唱作品の連続演奏をめざして精進を重ねている私たちは、2012 年の終盤、その当の企画の中央に立って、納得ゆく成果を目の当たりにしようとしています。

多くの方の賛同をいただき、激励され、お蔭さまでもうこれ以上、高望みすることはありませんが、前月の月報 604 号の中にも触れたように、「ふと一抹の淋しさもよぎります。なにか、この世の最期ふうになりはしないかと……」。[HP 月報バックナンバー欄参照<sup>(\*)</sup>]

ものごとの達成の一こまごとに、こういう気分を味わうのは世の常ですが、バッハ音楽の演奏にかぎって言いますと、一つの演奏会が終わって、次の楽譜をとり出し、あれほど持ち歩いた楽譜をしまう頃になると、「こんどまた歌うことになるのは、いつなのだろう、あるいは、新しいプログラムに追われて、もう一生涯うたう機会はめぐってこないのでは？」という、いささか感傷的なショックを経験します。なにしろ教会カンタータだけでも 200 曲ちかく残されているのですから。これは多くの団員からも寄せられる感想ですが、一方では「よい思い出になりました」とあっさり退団して、他の作曲家のもとへと蝶のような軽い足取りで移ってゆく、しあわせな(?) 方々もあります。

過去にも、海外演奏旅行や大曲の公演などの大きなイベントのあとには、団員が減るようなこともありました。こつこつと日常的に、カンタータなどの小品を積み上げてゆくよりも、《マタイ受難曲》や《ロ短調ミサ曲》など、大曲演奏の機会をねらって所属を転々とするという方が、とくに都会では多いような傾向があります。もちろん生き方には何でもありますから、50 周年の昂揚のあとには、どんな事態が待っていてもおかしくありません。

しかし企画側の主宰者としては、2014 年春の《ヨハネ受難曲》までを全力投球して、そのあとはそのうちに、とのんきに構えているわけにはゆきません。とりわけ、合唱団の運営面でこれまでも数々の節目を経験してきたものにとっては、次の一步は、ヴィジョンとして見すえていなければならないのです。

そこで、つねに言外に課題となっていた、私 (主宰者) の寿命と全曲 (少なくともバッハの教会カンター

### 合唱団創立 50 周年記念企画

#### バッハ 4 大合唱作品 [日本語] 連続演奏

<終了>

① 《ロ短調ミサ曲》(2011 年 12 月 3 日)

② 《クリスマス・オラトリオ》前半 (2012 年 11 月 9 日)

<今後の公演>

③ 《マタイ受難曲》(2013 年 3 月 30 日、紀尾井ホール)

④ 《クリスマス・オラトリオ》後半 (2013 年末)

⑤ 《ヨハネ受難曲》(2014 年春)

タ) 演奏とが、また浮かび上がってきます。巨人 J・S・バッハとの関係で、私にとってはどちらかといえば深刻というよりユーモラスな算数問題なのですが、いろいろ矛盾する欲求があって、とにかく 1 曲でも多くをとりあげたいという希望と、すばらしい、感動にあふれた曲を、1 回演奏するだけでお蔵入りさせるのは忍びない、もっと再演で味わいを深め、わがものとして満足する域にまでくり返したい、という願望とが、交叉するのです。

最近、またカンタータ日本語全訳の楽譜原稿をとり出して、くり返し推敲を加えているのですが、昨年出版した『バッハ コラール・ハンドブック』がぐっと役立ち、細かい点での手入れと訳詞の統一が、当然なされるべき手続きだったと思い知らされています。

これからは、当合唱団として手つかずのまま残している 60 曲ほどの未演奏曲と、すでにステージ上で取りあげた曲のうちでも、出版譜となった曲 (現時点で 62 曲、世俗カンタータを 1 曲含む) と楽譜未刊行の曲、これらの範疇をとり混ぜながら、定期演奏会のプログラムを構成し、あわせて楽譜全集の出版をも継続させていかなければなりません。ひろく皆さんのご希望もうけたまわりながら、やはり私個人の晩年を全うする契機をも考えたいと思います。

何が何でも“全曲演奏”をめざそうとする悪あがきは自制して、いくぶんでもこの合唱団により適する選曲を、と意識しかかったのですが、1 曲ずついいいに当たっているうち、まさにどの曲も、あらためてつくづく立派だと心を動かされ、作曲者が何という桁外れな人物だったことか、と驚くばかりです。

私の性格にもよりますが、これまでに演奏せずに残

\*) [http://bachchor-tokyo.jp/monthly\\_newsletter/index.htm](http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm)

された曲は、一言でいって暗く深刻な内容、神の怒り、審き、死への転落、病と罪の同一視など、気が落ちこむようなものが多くなりました。しかしまた、これだけの長い年齢を経た現在、若いころには敬遠したがったテーマも、バッハはさすが人並みでない音楽を思いついたもの、と舌を巻いたりもし、またとりわけ「3.11」を体験した私たちには、「悔い改めよ」「がんばれ」といった通り一遍の叱りや励ましの大声よりも、文句なしに頼れる者のふところに飛び込んで、思いきり泣いて慰められたい、「さあ、おいで」と手をひいてもらいたい、というのが本音ではないでしょうか。小さく微力な私たち人間の存在を、根底から思い知らされ、自然の一部であることを忘れかけていた私たちには、瞬間ごとに思わぬ形で死に襲われる覚悟が必要なのです。

ただ甘美に酔わせるのでなく、叡智に満ちて、冷徹に立ち向かうバッハの音楽を、短絡的にでなく、深くじっくり味わうのも、大切なサヴァイヴァルの人生になることと信じます。

冬の定期演奏会にはトランペット、ティンパニを含む大規模なもの、春には室内楽的な編成のものを中心に、多角的な配慮のもとに、2014年冬から55周年の2017年までを考えてみました。まだ素案ですが、ドイツのブライトコプフ社との交渉、楽譜制作の期間を入れると、決して早すぎることはありません。

今回はとくに選曲委員会をつくらず、団員、後援会員、どなたでも思いついた方々が直接、対案を伝えていただきたいと思います。みなさんも、生涯現役で、

ヴィジョンをかためてゆきましょう。

\*

実は、第111回、112回の定期演奏会を“嵐に耐えて”というタイトルのもと、3.11を憶える機会としたいとの思いから、福島県南相馬市在住の詩人・若松丈太郎氏に選んだ曲の訳詞をお送りし、被災した方々がどのようにお感じになるか教えていただけたらと、お伺いしたところ、つぎのようなご理解溢れるお返事をいただきました。単純な私は、舞い上がるような気持ちになって、福島でのステージ、地元の方々の前で演奏を夢見てしまいました。実現させてくださるスポンサーが現われないものか、とまで思い始めています。

「わたしたちはかかえきれない悲しみ、歎き、怒りを抱え込んでしまいました。たしかに、たとえばBWV 14 第3曲は、津波の被災者にとっては思い出したくない記憶を呼び戻すものになることでしょう。しかし、同時に、音楽は、(主に限らず)音楽も、「わなより救いたもう / 鳥 飛び立つごと / のがれさせたもう / …われらが救い」(同第5曲)となる力を持っています。音楽は、あるいはバッハは、そのための力になって、わたしたちを励まし救ってくれるはずです。[……]“嵐に耐えて”と冠した2回の定期演奏会は、聴く人びとを慰め、励まし、救いをもたらしてくれるにちがいありません。わたしは、そう思います。

2012年10月11日 若松丈太郎

2014年冬以降の選曲案(大村恵美子)

定期演奏会	新規出版の曲	既演曲、または楽譜既刊の曲(*)
第111回(2014冬) “嵐に耐えて”[Ⅰ] (106分)	BWV 97《わがすべてのわざ》	BWV 63《彫りきざめ この日》* BWV 110《よろこび 笑い あふれ》* BWV 190《主にむかいて歌え 新たな歌を》*
第112回(2015春) “嵐に耐えて”[Ⅱ] (81分)	BWV 14《かたえに 主いまさずば》 BWV 81《主イエス 眠り》 BWV 92《わが心 思い 神にゆだねたり》	BWV 227《イエス 喜び》(モテットⅢ)
第113回(2015冬) (88分)	BWV 62《いざ来たりませ 世の救い主》Ⅱ BWV 148《み名の栄光を讃えよ》 BWV 69《頌めよ 主を わが魂》Ⅰ	BWV 36《喜び のぼれ》*
第114回(2016春) (103分)	BWV 135《憐れむべき罪びと われを》 BWV 115《備えよ わが心》 BWV 146《あまたの苦しみをへて入るべし》	BWV 187《待ち望む みななれを》*
第115回(2016冬) (92分)	BWV 195《義(ただ)しき者には 光 現われ》 BWV 199《わが心は 乱れ騒ぐ》	BWV 16《主 ほめ歌わん》* BWV 41《イエスを頌めよ 新たな年に》*
第116回(2017春) (81分)	BWV 166《いずこへ 主よ 行きたもう》 BWV 188《わが堅きのぞみ》	BWV 21《われは憂いに沈みぬ》*
第117回(2017冬) (105分)	なし	BWV 192《感謝せん 神に》* BWV 248《クリスマス・オラトリオ》後半
合計	新規出版 14曲	カンタータ 11曲(内「50曲選」9曲) モテット 1曲 オラトリオ後半

## 「雅歌」に始まる《マタイ受難曲》後半

大村 恵美子

《マタイ受難曲》第2部の冒頭は、木管と弦に導かれた合唱つきのアルト・アリアから始まる。

30. アルト・アリア+4部合唱(合唱Ⅱ)

(アルト)

ああ 今や

わがイエス去りぬ!

(合唱)

いずこに なが友は

おお なんじ いと麗(うるわ)しき者よ

主に われ まみえんや?

いずこに なが友は 去りゆきし?

わが子羊は 虎の爪に かかれり

ああ わがイエス いずこに?

われらもともに

主を尋ね求めん

(雅歌 6:1)

ああ いかにかに答うべき?

憂いて問う者に

ああ わがイエス いずこに?

群衆にあらかじめ示し合わせておいたとおりに、ユダがイエスに近寄って挨拶し、口づけすると、人びとはイエスを捕らえ、弟子たちはみな、イエスを見捨てて逃げてしまう(マタイ 26:56)。ここで第1部が終わって、その次の場面が、この雅歌(旧約聖書、ソロモンの雅歌)引用の合唱をともなったアルトの独唱曲である。

ついで第31曲、捕えられたイエスが大祭司カイアフアのところへ連行され、最高法院での裁判が始まる。その後は、殺意のもとに共謀する人々による、これでもかという審判、嘲弄、暴行が間断なくつづき、その果てにイエスの十字架刑が決定される(マタイ 26:57- )。

《マタイ受難曲》の構成の大枠をみると;

### ・第1部

1. 大合唱〈来たり歎け娘らよ ともに〉(9分)

|

29. コラール合唱〈人よなが罪に泣け〉(7分)

### ・第2部

30. アルト・アリア+合唱(Ⅱ)〈ああ今やわがイエス去りぬ〉(4分)

|

68. 大合唱〈歎きつつみ墓のもと なれを呼びまつる〉(7分)

各部の始めと終りは、合唱曲で枠づけされているが、第2部冒頭の第30曲のみが演奏時間4分と小規模で、トゥッティではなく、アルト独唱と第Ⅱ合唱によるも

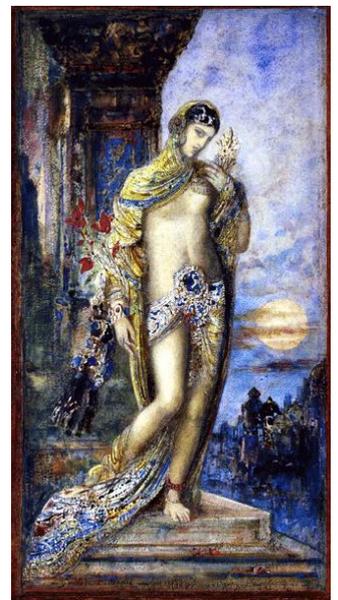
のである。第1部の第1曲、29曲の両曲をにぎわしたソプラノ・リピエーノ(児童合唱)は、第30曲以降の第2部にはもう現れない。

マタイ福音書の筋書きにしたがった登場人物も、群衆をのぞいては、第1部でイエス、祭司長たち、長老たち、ユダ、ペテロと弟子たちぐらいたったのが、第2部に入ると、あわただしく場面が展開するにつれて、偽証者、大祭司カイアフア、中庭の女たち、総督ピラト、ピラトの妻、兵士たち、キレネ人シモン、磔刑の強盗2人、通行人たち、イエスの家族たち、従った女たち、アリマタヤのヨセフ、等々、目まぐるしく、頻度もはげしく、多数の人びとが交錯する。その緊迫の度の増加する第2部の始めに、エロティックで、生身の肉体を感じさせる「雅歌」が配されるのである。

ちなみに、引用部分は、日本聖書協会「新共同訳」では(雅歌 6:1);

おとめたちの歌

あなたの恋人はどこに行ってしまったの。



■「雅歌」  
ギユスタヴ・モロー (1893)  
大原美術館像

### <次回定期演奏会>

バッハ4大合唱作品[日本語]連続演奏[3]

### 《マタイ受難曲》

第108回定期演奏会

\*

日時 2013年3月30日(土)14:00 開演

会場 紀尾井ホール

\*

鏡 貴之(エヴァンゲリスト/テノール)、渡邊 明(イエス/バス)

光野孝子(ソプラノ)、佐々木まり子(アルト)

鳥海 寮(テノール)、小松英典(バリトン)、草間美也子(オルガン)

東京カンタータ室内管弦楽団(管弦楽)

東京バッハ合唱団(合唱)、東京バッハ児童合唱団(特別出演)

大村恵美子(指揮/訳詞)

\*

前売り 4500円、当日 5000円(全席自由席)

[チケット販売開始:2012年11月20日]

### <後期練習の再開>

《マタイ受難曲》の後期の練習は、第107回定期演奏会《クリスマス・オラトリオ》終了の翌日、11月10日(土)より始まります。

・土曜日 15:30-17:30 荻窪教会(日本キリスト教団)

・月曜日 18:30-20:30 目白聖公会

新規のご参加を希望される方は、事務局までお問い合わせください。連絡先(当月報タイトル囲み内参照)

だれにもまして美しいおとめよ  
あなたの恋人はどこに行ってしまったの。  
一緒に探してあげましょう。  
となっている。

古来、「雅歌」に受難の予言をよみとる伝統があつて、バッハと台本作者（ピカンダー）とが、ここに雅歌を引用することに不思議はない。

聖書の雅歌そのものは、愛の対象をもぎとられた娘が主人公であるのではなく、相思相愛の、いちばん美しい娘と、彼女を求めて若い雄鹿のように山を越え、丘を跳んでくる若者との一对で、「恋しい人はかもしかのよう/若い雄鹿のようです。ごらんなさい、もう家の外に立って/窓からうかがい/格子の外からのぞいています」（雅歌 2：9）、「つかまえました、もう離しません。母の家に/わたしを産んだ母の部屋にお連れします」

（3：4）、「愛は死のように強く/熱情は陰府のように酷い。火花を散らして燃える炎」（8：6）、「左の腕をわたしの頭の下に伸べ/右の腕でわたしを抱いてくだされば…」（8：3）というように、肢体のすべてが美しく描写され、男女の肉体がしっかりと結ばれるエロスの愛が謳歌される。そのような、“あなたはわたしのもの、わたしはあなたのもの”の至福が、このアルト独唱（歌詞はピカンダーの作）では、黒い殺意によって、一気に奪いさられた、という驚愕と絶望。

ペテロたちとの、師弟関係を中心に進められてきたエルサレムの日々が、ずばり女性の肉体をクローズアップさせて、イエスへの思いが、ただ尊敬、服従だけでなく、日常身近に存在していなければならない、熱い関係なのだということを痛感させ、これから無残につきつけられる現実の重みに、なんとしても耐えられるように、との配慮で、ここに雅歌が現われたのではないだろうか。事実、第2部では、ソプラノ、アルト、テノール、バスそれぞれのレチタティーヴォもアリアも、一段と存在感をかけた情熱にいろどられ、息づまり、胸ふさがれる瞬間にしばしば襲われる。

そして、神との和解がなった第64曲〈夕べになりしころ〉（バス・レチタティーヴォ）以降は、がらりと空気が変わり、第30曲の雅歌の昂揚した炎は、いまや涼しい夕べの、オリーブの葉をくわえた鳩の平和となつて、静寂がみなぎりわたる。

最終合唱は、もう「よみがえり」の歓喜を間近にひかえた魂が、カタルシスの涙を流しながらも、ひととき憩いやすらぐ、岸辺の波頭の心地よいくらかえしである。人生には動も静もあり、すべてがある。苛酷な受難物語の数時間をすごしながら、「ああ楽しかった、また聴きにきたい」と、まったく皮肉なしに、素朴に感想を吐いて帰途につく人びとの群れに、私はいつも意表をつかれ、おどろかされるのである。バッハはきっと人生を知り尽くした人物だったのである。〈了〉

後援会員、公演ご愛聴者、月報ご愛読者のみなさま

## クリスマス懇親会へのお誘い

どなたも、大歓迎!!

- ・日時：2012年12月17日（月）、18時30分より
- ・会場：目白聖公会（月曜日の練習会場）  
（新宿区下落合3丁目19-4。JR山手線目白駅下車、「目白通り」を西へ徒歩5分）
- ・内容：ミニバザー、食事と懇談、ミニコンサート
- ・会費：1000円（当日、会場受付にて）  
◎バザー用の献品、または料理等1品、お持ちよりいただけるとありがたいです。
- ・参加お申し込み：要予約。合唱団事務局まで：  
FAX専用03-3290-5732、メールbachchortokyo@aol.com  
電話03-3290-5731、ハガキ（当月報タイトル囲み内）

後援会員、サポーターのみなさまと団員との交歓の機会です。ステージの顔とは別人の、“生”団員を見物にいらしてください。

創立50周年の今年、夏の創立記念懇親会（7月8日、アルカディア市ヶ谷）は、多くのご来賓、元団員も一堂に会し、華々しく催されました。冬の懇親会は、一転、いつもの月曜の練習会場をお借りして、団員の納会を兼ねた、恒例の手づくりクリスマス会です。どなたでもお気軽にご参加ください。

今年も、演奏会の会計支援を目的に、小さなバザーを併催します。献品とお買い上げ、ご協力よろしくお願いたします。（クリスマス会・バザー係）

### 東京バッハ合唱団 年末年始の活動スケジュール

11月	9日(金)	第107回定期、杉並公会堂
	10日(土)	《マタイ受難曲》後期練習開始、荻窪
	12日(月)	《マタイ受難曲》後期練習開始、目白
12月	17日(月)	クリスマス懇親会(年内練習は終了)
	22日(土)	荻窪教会クリスマス演奏会のリハーサル
	25日(火)	荻窪教会クリスマス演奏会、本番
2013年		
1月	12日(土)	新年練習開始、荻窪(目白は14日から)

### 荻窪教会クリスマス演奏会

2012年12月25日（降誕祭）

午後7時開演（9時終了予定）

会場＝日本キリスト教団 荻窪教会

#### バッハ《クリスマス・オラトリオ》（前半）

（日本語演奏）

フルート山田恵美子、チェロ船田裕子  
オルガン金澤亜希子、合唱/独唱 東京バッハ合唱団

指揮/訳詞 大村恵美子

<入場無料>

主催 東京バッハ合唱団